

学生ボランティアと中高生のインタラクションの特徴

—学習支援・居場所づくり事業での参与観察から—

植竹温香（東京大学大学院）

キーワード：ナナメの関係，自己開示，思春期・青年期

問題と目的

近年、貧困世帯の児童・生徒を対象とした学習支援・居場所づくり事業に注目が集まっている。こういった居場所づくり事業において共通して注目されているのが、大学生の事業への参加である。生徒と大学生の関係性は、しばしば「ナナメの関係」として語られ、学習支援の場が有効に機能する上で注目されている（尾崎，2018）。しかし、中高生が「ナナメの関係」にある大人とどのようにして親密な関係を形成し、その大人をどのように利用するかということは明らかではない。

そこで本研究では、貧困世帯の子どもに対する学習支援・居場所づくり事業を対象とし、その居場所を利用している中高生が、学生ボランティアとどのように相互作用しているのかのプロセスを捉えることを目的とした。

方 法

フィールドの概要 本研究のフィールドは、生活困窮世帯の中高生を対象に、学習支援及び居場所づくりを実施している事業の 1 拠点である。利用者は、中学 1 年生から高校 3 年生までであり、利用登録の条件は、修学援助、児童扶養手当、生活保護のいずれかを受給していることとされている。

分析方法 本研究のフィールドには、学校や家庭などで様々な課題を抱えている生徒もあり、実験や質問紙などの研究法に対する警戒心が強いと予想された。さらに生態学的研究の重要性から、日常文脈で子どもの姿を捉えようとする研究が求められている（木下，2006）。そこで研究者自身が、以前からボランティアとして実際に活

動に関与しているという状況に鑑み、本研究においては参与観察を行った。

分析単位 分析資料は、フィールドノート（観察時間：約 105 時間、文量：約 73 頁（A7 ノート））、研究日誌、及びボランティアとして活動する際に用いるファイルや生徒情報の記載されたノートなど各種資料である。

分析方法 箕浦（2009）を参考に、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Glaser & Strauss, 1967 後藤・大出・水野訳 1996）によるオープンコーディングを援用した。

結果と考察

生徒の研究者に対するはたらきかけを、「その行為を相手に対して取るということとはどのような意味を有するのか」という観点からカテゴリーに整理した（Table1）。

プロセスの分析の結果、積極的な研究者からのはたらきかけに生徒が応じるところから相互作用は開始され、徐々に自発的な研究者への自己開示が増えていくという発達モデルが想定された。

「ナナメ」の支援者は、自己開示の促進要因を有しつつ、自己開示を妨げると考えられる不安要素をほぼもたない、自己開示をするには、ある意味とても都合の良い存在となっている可能性が考えられた。臨床場面でも、自己開示をすることの意義は指摘されており（葛西・徳永，2003）、学習支援・居場所づくり事業において、生活困窮世帯の青少年を支援する際にも、「ナナメ」の支援者が生徒の自己開示を促し得る存在として価値を有する可能性は高いだろう。

Table 1 生徒の行為の意味カテゴリーの概要

2次カテゴリーとその操作的定義	1次カテゴリー	操作的定義
a. 応答拒否：研究者のはたらきかけに対して、反応しなかったり、応じる意思が見受けられない様子	a-1. 無反応	研究者のはたらきかけに対して、ほとんど反応しない
	a-2. 拒絶	研究者のはたらきかけに対して、研究者を立ち入らせないようなふるまいをする
	b-1. クローズドクエスチョンに答える	研究者の投げかけたクローズドクエスチョンに対して一対一で対応する答えを返したり、研究者の提案や誘い、解釈などに対して、意見を伝える
	b-2. オープンクエスチョンに答える	研究者の投げかけたオープンクエスチョンに対して一対一で対応する答えを返す
b. 応答：研究者のはたらきかけに対して、応じる様子	b-3. 研究者のはたらきかけをかわす	研究者のはたらきかけに対して、きちんと答えず、受け流したりごまかしたりする
	b-4. 研究者のはたらきかけに共鳴する	研究者の真似をしたり、研究者のはたらきかけを突いたりして、一緒に研究者とのやりとりを楽しむ
	b-5. 研究者のはたらきかけに対する自分の理解状況を伝える	研究者の話についていけているかいないかを、表情や言葉で表現する
	b-6. 研究者のはたらきかけを受け入れる	研究者からの要請や提案に応じたり、お礼を言ったりする
	c-1. あったこと	身の回りで起きたことや自分の行動、状態のことについて話す
	c-2. これからあること	これからの予定などについて話す
	c-3. 今思っていること	自分がいまどう思っているかについて話したり、研究者に疑問を投げかけたり、謝ったりする
	c-4. 昔思っていたこと	以前自分がどのように思っていたかや、動機について話す
	c-5. これからどうするつもりか	これから自分がどうしようと思っているかについて話す
c. 発話：自発的に私に話をする様子	c-6. どうしたいか	自分が将来どうしたいと思っているかや自分の希望について話す
	c-7. 好きなこと	自分の趣味や嗜好について話す
	c-8. 研究者への評価	研究者に対してどう思っているかを伝える
	c-9. 自己評価	自分についてどう思っているかを伝える
	c-10. 説明を加える	自分の話していることやものについて、研究者が分かるように詳しい説明を付け加える
	c-11. 理解を共有する	研究者が話についてこられているかどうか確認したり、自分がどう考えているかについて同意を求めたり、確認したりする
d. 要請：積極的に研究者に何かを求めてはたらきかけてくる様子	d-1. 研究者についての情報の提供	研究者がどう思っているかやどうする予定かなど、研究者についての質問を研究者にする
	d-2. 研究者以外のことについての情報の提供	他のスタッフについての情報や自分の興味のある話についての情報を得ようと質問する
	d-3. 直接的な要請に応じる	「～して」や「～しよう」の形で明示的に研究者にお願いをする
	d-4. 間接的な要請に応じる	はっきりとは言わないが、研究者にどうしてほしいかを伝えている
e. ネガティブ感情の表出：感情がコントロールできず、表出されてしまっている様子	e-1. イライラ	げだるげな様子や不機嫌そうな様子、無表情でいるなど、人を近寄らせないような態度
	e-2. 悲しみ	泣いたり弱々しい様子を見せたりして悲しみや苦しみを表出する態度
	e-3. 不安	何かを不安に感じて、焦ったり、諦めたりする態度
f. その他：a.～e. に該当しない生徒の様子	f-1. おきまりのやりとり	研究者との間で慣習的になっているやりとり